

NETWORK

- ダメ人間だから起業家になれる  
 -反ベンチャービジネス論の試み- ..... 2
- 最後まで人間として尊厳を失わない村づくりへ  
 の思いをかけた9年間のがんばり-ニコニコ生活村- ..... 7
- NPO法で市民活動は良くなるか-第55回地域ゼミ- ..... 11
- 天神にて人もうけの会-第6回よかネットパーティー- ..... 13

見・聞・食

- 白砂の自然環境と生活防災施設 ..... 14
- 山村集落にも遊廊があり、多くの文化が息づいていた  
 -大分県宇目町木浦鉾山- ..... 15
- 介護保険とは何か ..... 16
- 市内一のノッポビルはホテルのような高齢者施設 ..... 17

近況

- ひまわりフェスタ in 海の中道 ..... 19
- “まちづくりなしで再開発はあり得ない”  
 -九Qの会今年度の活動について- ..... 20



**天神にて人もうけの会**  
 -第6回よかネットパーティー-

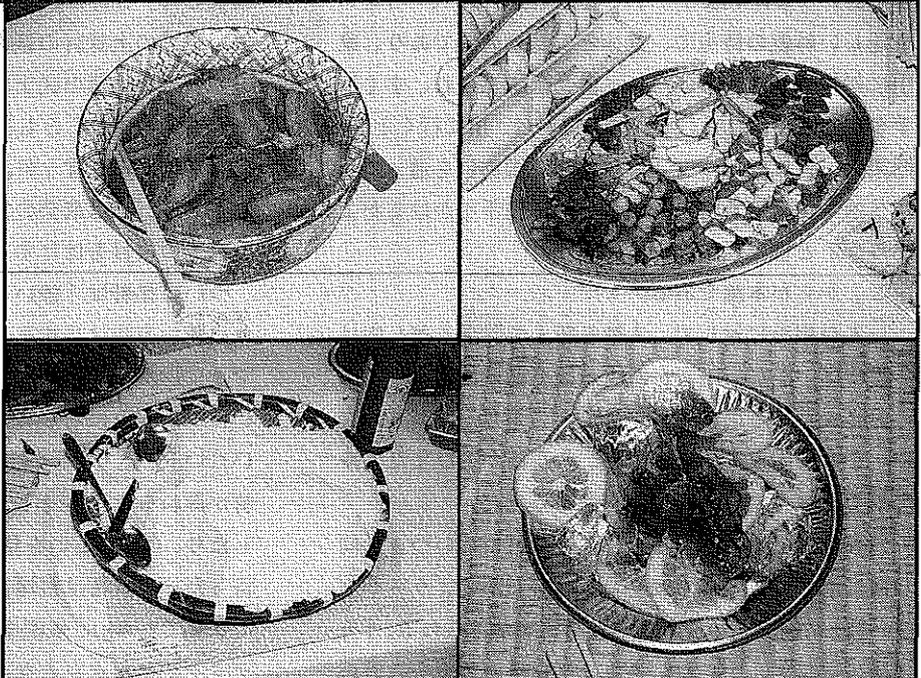
左上 黒豚煮込み (手作り)  
 材料にもこだわった逸品

右上 燻製 (手作り)  
 水境天満宮にて所員が手  
 作りした燻製

左下 ざる豆腐 (唐津)  
 大豆の風味が豊かな豆腐

右下 鮎背越し (日田)  
 日田の新鮮な鮎の背越し

※詳細は本文



## ダメ人間だから起業家になれる

—— 反ベンチャービジネス論の試み ——

近所の本屋の雑誌の棚を覗いていたら、ベンチャーとか独立とかいった名前の雑誌が並んでいた。大きい書店ではないのに5冊もあった。ちょっと見て5冊ということだから、もっとたくさんあるに違いない。単行本も入れると何十冊もあるだろう。これだけ評判になるということは、ベンチャーとか起業とかいうことが、格好のいいことだという、社会的認知を得ているのだと思う。

しかし、本当に起業というのは、冒険心に富んだ賢い人が、格好よくやることだけなのだろうか。私は、決してそれだけではないと思っている。それは不況などで世の中が不安な時期に新しい会社がたくさん起きていることから言える。つまり、うまく働き口を見つけられない、追いつめられた人間が起業をやっているとも考えられる。その考えを、私自身の体験をまじえながら書くことにする。

### 〈臆病者がベンチャーをやった〉

山本周五郎の書いた「ひとごろし」という小説がある。粗筋をかいつまんで紹介する。

一応福井藩ということになっているが、双子六兵衛という、家中一番の評判をとった臆病者がいた。26歳にもなるのに、夜の暗がりが恐ろしい。妹のかねは21歳になっているが、「お兄さまに嫁のきてがなく、わたくしにも一度も縁談がございませぬ」と、いつも兄につめている。そんな折、仁藤昂軒という御抱え武芸者が、兎狩のとき争論になって、御側小姓を斬って退散するという事件が起こった。その武芸者は6尺一寸という逞しい軀の持主で、剣術と半槍の名人であり、家中に対抗できる人はいない。藩公は激怒され、すぐ追手をかけると命じられた。一方昂軒は、出て行くとき、門弟の一人に向かって「これから北国街道を通過して江戸へゆく、逃げも隠れもしないから追手をかけるがよからう」と言い残した。

ここからが本論である。

一人の相手に対して、人数を組んで討手を差し向ける訳にはいかないのが、武士の建て前である。とすると、必ず負けるのに「私が…」と名乗り出る者もいない。そこで困っていたところ、六兵衛がおびえたような顔で、軀をふるわしながら名乗り出た。

六兵衛は、追手に出ると程なく昂軒に追いつき、同じ宿に泊まって翌日も後をつけた。しかし、うっかり追い越したらしく、突如後ろから声をかけられる。「その顔には見覚えがある。きさまは討手だろう」と言わ

れて逆上し、「ひとごろし」と叫び「誰か来て下さい、人殺しです」と悲鳴をあげて逃げた。そして休んでいると、六兵衛の話を「うまく逃げた、逃げるが勝ちだ。相手は鬼のような浪人者で、10人や20人殺したような面構えをしていた。往来の衆も皆逃げていった」といって話しながら通りすぎる旅人がいた。

そこで六兵衛は「おれの臆病者は、かくれもない事実だから、その手でいこう」と考え、昂軒を見かけると「ひとごろし」とわめき、茶店で休むことも、宿に泊まることも、できないようにしてしまう。「卑怯者、勝負しろ」と言われても、「ひとごろし」と叫んで逃げる。正式の上意討の証書をもっているのだから、途中の町方の役人や他藩の武士も、六兵衛に好意的である。昂軒は茶店で休むことも、宿で体を休めることもできず、六兵衛に文句を言うが、「あなたには剣術と槍という武器がある、私は武芸の才はないので、私なりのやり方で自分の役目をはたす」と言う。

ついに昂軒は「強いということには限度がある。それに勝つ方法は必ずある。しかし臆病者に勝つことができないんだ」と言い、「おれはここで腹を切る」と言いだす。それに対して「それは困る、鬚を切ってもらいたい」と言う。「それが首の代わりになるのか」と昂軒が尋ねると、「生首は腐るからな。それに私は人を殺したり、自害するのを見たりするのを好かないんだ」と言った。六兵衛は首尾よく上意討をはたし、旅の途中で嫁までもらい、帰国後、妹にも上々の縁談があり、メデタシ、メデタシとなる。

これは臆病を武器として目的を達した話である。

〈ベンチャー継続のためには臆病が不可欠〉

私は、現在の商売（地域計画コンサルタント、シンクタンクという人もいる）に入って30年になる。われわれの事務所の発足は1967年で、大阪万博の全体計画を手伝っていた連中が京都に事務所をもったというようなことで、「アトリエ・アルパック」と称していた。言うなれば「万博くずれ」の巣がスタートとも言える。

「若い高学歴の元気のいい連中がワイワイやっとなるけど、誰かまとめたらんとあかんで…、行ったらへんか」という友人の言にのって、私が参加したのは68年である。行ってみると、なんだか生意気な事務所（アトリエ）で、土曜日の午前には全員で「ミーティング」をして、民主的に運営するというような雰囲気であった。ついでにふれると、法人事業所は失業保険に入ることになっているので、その手続きをしたところ、「われわれのような、絶対に失業するはずのないものが、なぜ失業保険に入るのか。こういう無駄な金を事務所で負担するのは問題だ」と民主的な土曜ミーティングで言われて、あっけにとられた。ガルブレイスの「豊かな社会」を読んだのもこの頃だったと思う。まさに豊かな社会が日本でも始まっていて、事務所の外には大学紛争があり、全国的に革新自治体の拡大が進んでいた（京都はその総本山）。

かく言う私も、小心者ながら、子供2人の家族持ちで転職したわけで、豊かな社会の端っ子あたりにしがみつきつつあったのかもしれない。

とは言っても、こんな仕事のようなものが商売になる（正業として認知される）などとは思っていなかった。ひょっとしてビジネスになるかもしれないと思いついたのは、野村総研や三菱総研のできる昭和46、7年頃だった。しかし彼らはコンピューターサービスのメンバーが大半で、そのかわりで、ほんの少しのメンバーがコンサルタントのようなことを始めたというようなことだったと思う。

私が事務所に行って、やっとなりがわかりだした頃、隠岐の西郷町の企画課長さんから電話がかかってきた。運悪く私が電話をとったところ、「報告書はどうなっているでしょうか」といわれた。「私はまだよくわかっていないので、担当の者に確かめてお返事させていただく」旨返事しておいて、土曜ミーティングにかけた。当日「西郷町から電話がかかってきていて返事をしなけ

ベンチャー雑誌各種



ればならない。①担当は誰なのか、②仕事はどこまで出来ているのか、③調べてみると、数人で現地調査に何回も行っているの、旅費の合計支出と委託金とはほぼ同額になっているがどうするのか」と聞いてみた。

そのときミーティングの結論は出ず、ウニャムニャになってしまった。「西郷町へは行ったが、土曜ミーティングで、皆で決めて行ったのであるから、行った人間が責任をとるというのはおかしい。まして今自分たちは他の仕事で忙しいので西郷町のレポートづくりはできない。」というのが出張に行った所員の意見であった。「これは大変だぞ」というのが私の実感であったが、電話を取ってしまったので、今後の対応について返事をしなければならぬ。私と新しく入った所員で現地に行き、先輩所員に教えてもらいながら、あらためて調査計画スケジュールをたて、早急に報告書をつくることになった。

「これはタマラン」というのが、当時の私の感想であった。これへの対策はどうしたらよいのか。

〈勇猛果敢に進みはじめても、続かなければビジネスとは言えない〉

対策としての結論は、「原価管理をやること」だと思った。つまりコスト意識をもつこと、会社という法人として、対外的に契約して仕事をしてゆくことは、収入と支出のバランスがとれねばならない。われわれの仕事のコストは、人件費、調査などの旅費交通費、事務所維持費、それに資料代などである。大半は人件費で、これが仕事にどれだけかかっているかが分からないと意味がない。そのためには、どの仕事に誰がどれ

だけ時間をかけているかが分からなければならない。これが大問題であった。高学歴で理屈をこねるのが商売のような連中が、オイソレとは従わない。この習慣をつけるということは大仕事であった。問題は2つあり、そのひとつは仕事の中には2年にわたるものが多く、原価管理を始めても、目安として活用できるまでには2~3年かかる。もうひとつは「この程度では正確ではない」という反論であった。結局3~4年にわたる大仕事をへて、なんとか仕事別の状況がわかるようになった。

この原価管理を始めるに当たって私は①皆が自分で分かる気になればいいので、個人の成績は気にしないことにし、②費目や金額についても細かくやり過ぎて事務量が增えないようにし、③正式の元帳とは別の目安帳、のつもりであった。また、そこそこにつかめれば、見積の資料にもなるのである。

我々の仕事は、生きた人間の頭の活動に依拠しているのだから、「ええ加減」の頃合いが大切で、生身の人間をしめ上げるようなことにならないように考えた。しかし、計算力の抜群な連中の集団というのはむづかしい。所内のグループによっては、個人別の経費から利益率まで割り出して、あれこれしめ上げるものまで出てきた。なかなか難しい問題である。

いろいろ問題は出ても、事務所の方針としては「いちいち個人をチェックするつもりはない」ということを言い続けた。ムダのない創造集団なんていうものは存在価値がない。自己管理は必要だが「ええ加減」な雰囲気までなくしたら元も子もない。

細かく言えば問題はあっても、今でも必要なことだったと思っている。アルパックは、今では100人ぐらいの世帯になり、卒業生が起業した事務所も含めると300人ぐらいになっていると思うが、ほとんどがアルパック型の「ええ加減」な原価管理をやっているようである。

ひとつだけエピソードをつけ加えたい。

オイルショック後の昭和52、3年頃、事務所は京都、大阪の2カ所で、所員も30人ぐらいになっていたと思うが、仕事がなくて困っていた。私は古参のメンバーに営業活動をするように督励していた。その時、古参の同僚が寝るような、茶化するような言い方で「糸乗さんさえ来なければ、会社になることもなかったのになあ〜。5~6人のアトリエのままだったらこんな困

ることもないのに」と言った。私も全くそうだと思う。「原価管理」をはじめたことにより所員も増え、「会社」になってしまっていた。まさにそれは「諸悪の根源」だったのである。

最近「史上最悪の不況だ」などとマスコミが騒いでいるが、オイルショック後の方が不況感が強かったように思う。マイナスシーリングという言葉で不要不急な予算はカットされた。役所にとって、コンサルタントなどの企画仕事は役に立つかわからない不要不急な業務であった。ところで近年は、企業は不況でも、個人は豊かである。当時は、2年も不況になると参ってしまうぐらい底が浅かったが、現代は5~6年も不況が続いているのに、土・日ともなれば郊外はクルマの渋滞である。その面を見る限り、日本はまだまだ好況だ。しかし、将来についてはオイルショックの頃より不安が大きいように思う。

〈新しい仕事をやるには、現場に強くということ、つまりニード第一が起業の原点〉

話は隠岐の話にもどるが、当所アルパックは「現地主義・総合主義・実証主義」という看板をかかげていた。今も変わらないのではあるが、時代の雰囲気もあって、小理屈をこねることばかり先行していた。

隠岐の仕事は楽しかった。現地主義であるから、まず実態を知らねばならない。また隠岐は離島であるので、「島」というかたまりとしてとらえることができるかもしれないも思った。農業改良普及員と、畜産改良普及員、林業の人、漁業の人と、多くの人々と話し合った。

「なんとか隠岐が、地域として自立することができないか」を考えるために、西郷町以外の役場にも話をきいて回った。また島経済としての自立を考えるということで、船会社や農協、漁協、観光関連などについても資料提供をお願いして回った。

データを整理していくうちに、大問題が出てきた。ひとつは人口予測で、もうひとつは島経済の収支である。

私は全くの門外漢で、編集屋と土建屋のことを少し知っているだけなので、先輩所員（といっても歳は若い）に聞くのだが、「計画人口は決めてあるのですか」ということであった。「計画人口…どうしてきめればいいの…」と聞くと、「チャンと予測しなきゃだめです」と言われる。「予測?」。「予測の方法っていろいろありましてね、最小自乗法の1次式と2次式ぐらいわかれば

いいのじゃないですか」、「それは？」。「この式にあてはめればいいのです」といってやさしく教えてくれた。

小生はその頃から、 $x$ とか $y$ とか、 $a+b$ などという式を見せられては、それほどいい気分というわけにはいかなかった。経済学部出身といっても最劣等生であり、仲間で文芸誌をこねたりした程度しか、大学とのかかわりはない。「ちょっとすまんけど、計算してくれんかなあ」「じゃあ昭和30年、35年、40年の国勢調査の人口を出して下さい」。

その数値を式に入ると50年、55年、60年…と予測値が出てきた。それをグラフにして、「さすが大学院を出た専門家だけのことはある」と思っていた。ところが、なんとなく気に入らない気がした。

「10年後、20年後の人口予測ということだから、新しく生まれた子供の数もきまっているにちがいない」と思い出したのである。

「新しく生まれる子供の数はどういう理屈できまってくるのかなあ」

「？」

「この式では、子供の生まれる数はどうきまるの」

「子供の問題じゃないんです。全体の傾向を予測してるんです」

「だけど、子供を生みそうな年代の人が都会に出てしまっていて、極端にすくないんです」といって作ってあった人口ピラミッドを見せた。「そんなことを言っても、こういう予測をすることになっているんですからこれでいいんです」。

「もし地元の人が同じようなことに気がついて、質問してきたらどうしたらいいんでしょうねえ」。

「？」

「現地の事情がちがうし…」といっても現地主義ではやらねばならない。

せっかく方法を教えて、計算までしてやったのに、ケチをつけやがって…一寸険悪な雰囲気になってしまった。もう誰も面倒みてくれない。いろいろ調べてみたが、予測方法はやっぱり彼のいう通りである。しかし一応気になったものは引っ込めるわけにはいかない。〈コーホート推計を、無知ながら手計算でやってしまった話〉

調べた中に、「女性が一生に2.13人子供を生むと人口は減らない」というのがあった。

生まれる子供の数は、「20～40までの女性が、生涯

2.13人生む」ということにきめた。その他の人々の趨勢は、年齢ごとの推移率で決めることにした。この推移率は、隠岐を閉鎖した場合と、どんどん都会へ流出していく場合の2通りがあることになる。

今なら「コーホート推計」などといって、パソコンに入っているのだから、数値を入れるだけでピラミッドのグラフまで出てくるが、当初は手計算であった。私の計算なんて全く当とらないので、京大大学院のS君とK君に来てもらって（アルバイトとして）頼んだ。

ある時、隠岐から帰ってくると「S君が糸乗さんをえらいさがしていましたよ」といわれた。

早速、S君に連絡をとって会ってみた。「なんかわからんことでも」。「いやあ計算はやってみたんですけどね。5年ごとに繰り返して計算せえと言っていたでしょう。女の人の数に2.13を掛けたらいいということだったけど、F村は男の人がほとんど居らん数値になっているんですけど、女だけで子供が生まれるということにしていいんでしょうかねえ」「うんそれでいい。男がおらん？その時は君がいくんやな」

「？」

しばらくは、私の言った冗談が通じないようであった。

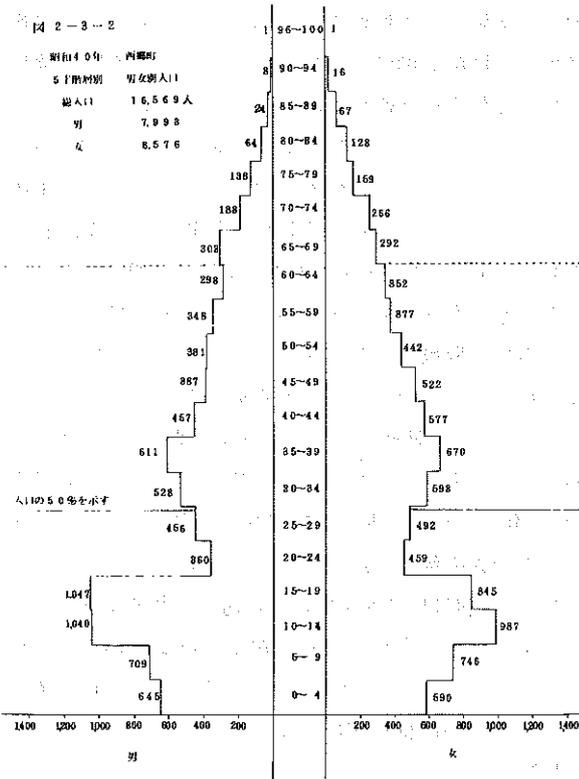
よせばいいのに、S君はこの時のやりとりを大学でしゃべってしまった。ついに評判になって、「S、オマエF村にいったガンバルのか」などと言われるハメに落ち入った。

隠岐の人口ピラミッドは、生産年齢人口の世代は大部分都市へ出てしまっていて、極端に少なかった。その中でも20～30代の男の人口は少なかったのである。

はたして最小自乗法による推計と無知から始まった予測とでは、推計値に大きな差が出た。また無知な方の推計値は、年代別の数値が出てくるので将来に対する問題を考えるには都合がよかった。それ以後またまた町の人たちへ、「このままいったら…」という話をし議論をしてもらった。この将来人口については共に心配し、どんな産業を興したらいいのかを考える人が多かった。しかし中には「計画とかビジョンというのは、将来の明るいことを画くのではないのか。そんな暗い予測は話してもらわんでもいい」という人もいた。〈推計はひとつのデータであって、その先まで見ないと地域は分からない〉

農林統計事務所には熱心な職員の方がおられ、無知

西郷町人口ピラミッド



な私にいろいろ教えて下さった。その人たちの協力を得て、隠岐全体の収支をつかむことができないかと思ってみた。

港や農協などの貨物のデータや観光客の数からみた収入、高校から松江へ越境入学させるための費用や、東京の大学にやるための仕送り、いろいろメモしながら考えていったが収支は全く合わなかった。収入（島としての）が少なそうなのに、それほど困っていないし、島は結構豊かな感じなのである。

「どうもわからん」とブツブツ言っていたら、「何かあったんですか」と旅館の主に聞かれた。気になっていることを説明すると、しばらくして「仕送りは計算されましたか」と言われた。「そりゃなんですか」「この隠岐の国の人は船乗りが多いんです。水産高校出は世界中で船員になっているんです。船員の給料はいいですから、相当な金額になりますよ」「そりゃいくらぐらいあるんですか」「少なくとも一人年に100万円は下らんでしょう。それが何百人もありますよ」ということであった。

当時の初任給は3万円ぐらいであった（週間朝日編の本で調べてみると、昭和43年の大卒の銀行員が30,500円、高卒22,000円）。家への仕送りだけで100万円は

下らないと言われて、データの積み上げを計っていた私はガックリ来た。

統計は事実の一部を示すだけにしか過ぎない。真実は、多くのいろいろな人たちの知っていることの総体だということがわかった。

隠岐の体験は、その後の私の仕事の出発点になった。

島経済の、収支をとらえるということについては失敗したが、どこの地域を見る場合にも地域の自立を考えるクセがついた。また無知でも自分の納得のいく方法を考えることから、まだ誰もやっていない方法でデータを作ることができた。これも、無知だからこそベンチャーになれる、ということを示しているように思う。

ついでに隠岐のことにもうひとつふれると、離島というところは晴天が続くと魚が食べられないのである。島へ寄らずに境港の市場へ運んでいってしまう。丁度晴天続きのときに4~5日滞在した。毎日、朝昼晩という感じでアワビと小魚ばかり食べさせられた。「アワビばかりやな」と文句を言ったら、「ここはシケにならないと船は入って来ん。これでも味噌煮にしたり、いろいろ変えて料理しとるんよ」と言って叱られた。その後、これほど贅沢な文句を言ったことがない。

〈ワールド・カップ・サッカーとベンチャービジネス〉

若乃花が連続優勝した時のインタビューで「仕事ですから」という言葉を2、3度発したのが非常に印象に残っている。

サッカーのワールドカップの監督もビジネス（仕事・本務）だと思う。その監督が代わって岡田監督になったとき、これは面白いのかもしれないと思った。こんなことを書くと「オマエみたいなものに何がわかるか」という人がいると思う。正にその通りである。

この文章が皆様方の眼にふれる頃には終わっているのかもしれないが、この原稿を書いている今はまだ、日本は一試合もしていない。しかし「かなりやれる」のではないかと、私は思っている。その理由は、前任監督の時はベンチャービジネスではなかったが、岡田監督になってベンチャーになったと思うからだ。

その岡田監督が、古参の有名選手をメンバーからはずした。「これはいよいよいける」と私は感じた。「彼をはずしたのは失礼だ」などという意見もでたが、それは建前ビジネスの世界である。岡田監督は「角落ち」だと言いたいのだろう。少なくとも前任者と比べるとそうだろう。しかし、これはなかなかよい条件で

ある。

岡田監督は、何もむずかしいことを考えずに態度をきめたのかも知れない。しかしベンチャーをやれる程度の人間は、むずかしいことを考えずに行動できるのである。

監督はベンチャーに走った。彼のメンバー達もベンチャーをやるだろう。日本のサッカーは駆け出しであるから、ベンチャーがいい。勝負はともかく、よい試合になるだろう。(糸乗 貞喜)

最後まで人間としての尊厳を失わない  
村づくりへの思いをかけた9年間のがんばり  
—ニコニコ生活村(大分県三重町)

昨年、福岡県高齢者共同組合が主宰する「食・農・命のシンポジウム」の実行委員として運営のお手伝いをした折に、診療所、デイケア、老健施設、高齢者住宅、農園、工房など、生活と医療・保健が近接して立地した「ニコニコ生活村」(大分県大野郡三重町)の話聞いて、強く興味をひかれた。「高齢者が最後まで生きがい失わない村づくり」「命が大切にされる場づくり」という村のテーマが本当に実践されているような感じだった。今回、現地に行き、村づくりに携わってこられた杉谷岩彌さん(医療法人ニコニコ診療所専務理事)にお話を聞くことができたが、お話を聞くうちに、係わってこられた人々の思いでここまでやれるものか、と大いに勇気づけられた。

位置図  
ニコニコ生活村は  
大分県三重町にあり、  
大分市から車で  
1時間。



〈9年間で170人の雇用を創出。すべての施設が村の賑わいづくりに貢献〉

まず始めに話を聞いて驚いたのは、ニコニコ生活村は、わずか9年間の活動で170人を雇用する、三重町で二番目に大きな職場になっていることであった。

大きな病院一つ、工場一つ誘致すれば、雇用という点で見れば、確かに同程度の雇用効果は得られるかもしれない。しかし、こちらの村には医療・住まい・職場・農作業・保健福祉・食事サービスといった多様な要素があり、それぞれの機能が村の賑わいづくりに貢献している。

ちなみに170人の雇用を生み出したニコニコ生活村にはどんな施設があるのかみてみたい。(図表1)

これだけの施設を作り上げて活動させてきた9年間のタイムスケジュールを、頂いた資料を参考に整理すると図表2のようになる。

かなり短期集中型のとりかかりである。なぜ、これほどの早さでやってこれたのか。

以下の話は、杉谷さんからお話を聞くうちに、最も強く心をひかれた点をまとめたものである。

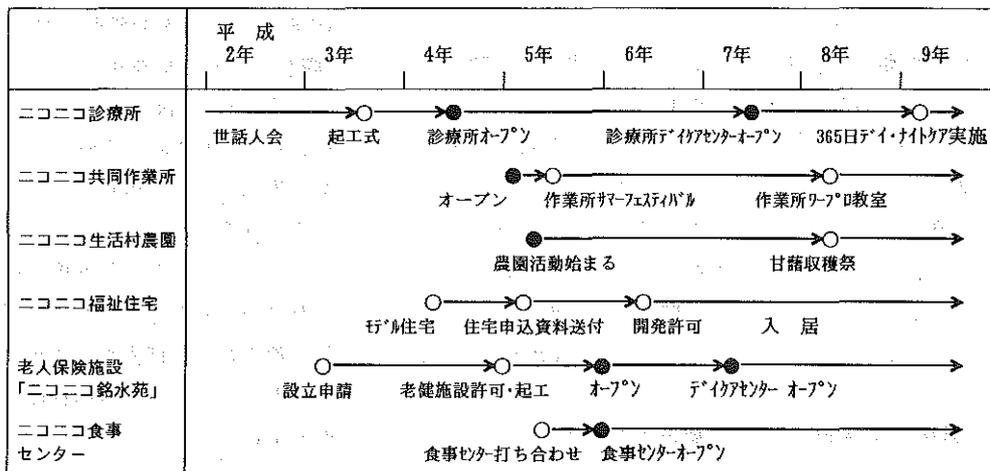
〈肉親の死が「最後まで人間としての尊厳を失わない村づくり」を考えるきっかけに〉

ニコニコ生活村の村づくりのきっかけは、約17年ほど前にさかのぼる。杉谷さんが自治体職員として働いておられた昭和56年頃、公私ともに親しかった辛島先生(三重病院の医師)との酒飲みでの話に始まる。

図表1 ニコニコ生活村の主な施設概要

1. ニコニコ診療所(平成4年8月オープン)
・11の診療科、労災・生活保護・原爆医療の医療体制、リハビリセンター、デイケアセンター、鍼灸室
・平成9年から365日のデイ・ナイトケアを開始
2. ニコニコ共同作業所(平成5年1月オープン)
・社会福祉法人の共同作業所で、現在、10人の知的障害者が通所で作業している
・パン製造、味噌、紙すきなどを手がけ、老健施設「銘水苑」入所者肌着の洗濯作業も行う
3. ニコニコ生活村農園(平成5年5月オープン)
4. ニコニコ福祉住宅(平成5年6月開発許可)
・福祉住宅で有事の際にニコニコ診療所から医師が駆けつける。診療所とはベルでつながる
・分譲地は土地50坪、建坪20坪の平屋住宅(土地500万円、建物1300万円)、26区画は完売・賃貸は自立生活可能なお年寄り向けが3.5万円/月、365日 3食の配食つきが7.5万円/月
5. 老人保健施設「ニコニコ銘水苑」(平成5年12月オープン)
・入所定員は100名。ショートステイとデイケアサービスを行う
6. ニコニコ食事センター(平成5年12月オープン)
・「ニコニコ銘水苑」を中心に365日3食配食サービス、1日1,350円(平成10年6月現在)

図表2  
ニコニコ村の計画と関連する事業沿革



二人は医療・福祉に近接した住宅づくりができないか考えていた。というのは、杉谷さんの心に、その頃亡くしたお母様のことが心に引っかかっていたことによる。「一人暮らしで病気がちだったが、最期には独り暮らしをして病院に行けず、孤独死という最期を迎えてしまった。そのとき、人間として尊厳を失わない最期の迎え方とは何かと考え、普段は自分のペースで生活できて、何かあった場合に医療・福祉が近くにあり、すぐに駆けつけられる・・・そんな生活の場が世の中にいるのでは、と思っていた」と杉谷さんは語る。

この時、一緒に話をしていた辛島先生も、同じようにお母様を亡くされて、生活と医療を密着させる場について考えていたという。

この思いはしばらくして準備活動にうつされた。

三重町で医師として働いていた辛島先生の話もあって、まず辛島先生を中心に「生活村世話人会」が平成2年6月に組織され、杉谷さんも参加することに決めた。

杉谷さん個人としては、当時、自治体の福祉関連のセクションにあって、働きたい高齢者や障害者が働ける場をつくる運動、また、障害児達も安心して遊びにいけるバスの運行の実現に携わったこともあった。

「何とかせねばと思うと、すぐに実行しないと気が済まない性分なんです。そこで、平成2年の子供の日(5/5)に退職しました。定年まであと数年だった(退職時は56歳)。そんなユメのような話は絶対に上手くいかないからバカなことはやめた方がよい、と言ってくれる人が大勢いました」という。

「とにかく思いだけで動いていた。いきあたりばったりでも絶対にやるという気持ちは常に捨てなかった」ニコニコ生活村の設立世話人会の発足当時のパンフ

レット(杉谷さんから頂いたもの)をみると、メンバーが議論を重ねてつくったニコニコ生活村の構想が載せられている。

高齢者の生活と一口に言っても、独居世帯か夫婦世帯か、持病もちか健康か、あるいは寝たきりか自活可能か、など、個々の生活条件は様々考えられるが、このニコニコ生活村の構想では、住む、働く、癒す、集うなどの様々な要素があり、自分のペースの生活を維持しやすいように配慮されている。

後で触れるが、こうした機能を周辺地域と調和した整備の仕方が特徴になっている。つまり、はじめから規模の決まった開発規模ありきで・・・という土地処分主導の発想とは違い、地域と人に役に立ちながら徐々に活動を広げていくということに力点が置かれている。

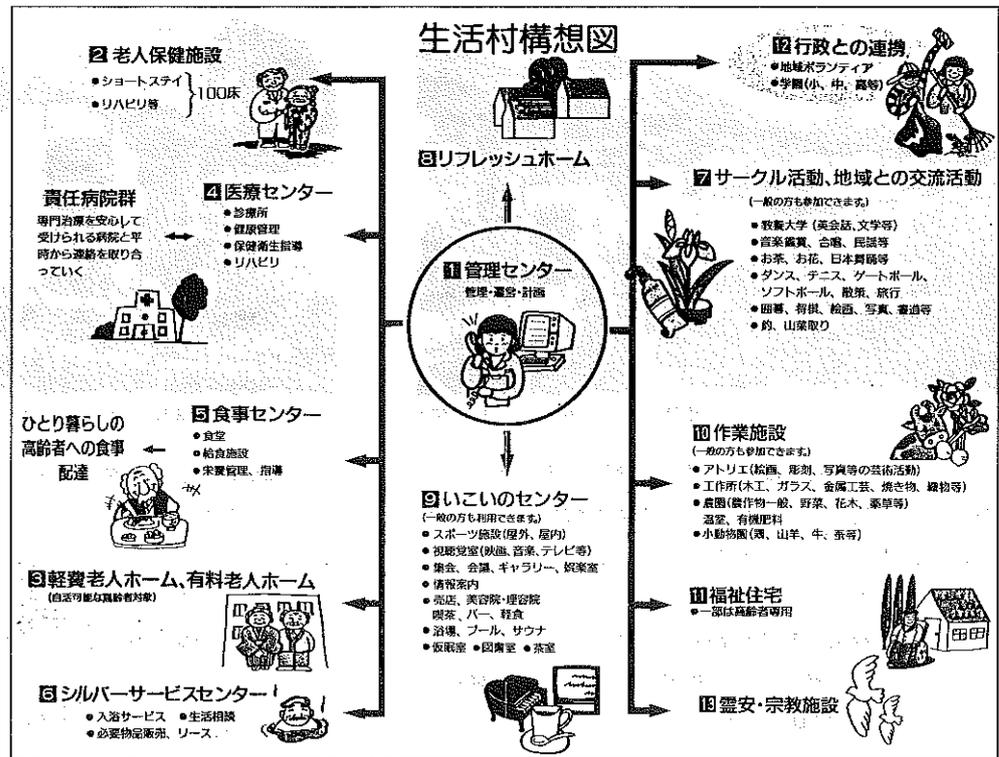
こうした構想づくりにおいては「日中のまじめな会合だけでなく、仲間うちの酒飲み場でワイワイやっているときにも、いろいろな企画のヒントになる話がでた」と杉谷さんは当時を振り返っている。

この構想(図表3)で描かれた施設の大半は実現している。同時に大分県福祉生協準備会の設立などニコニコ生活村の活動の母体づくりにも係わるなど、将来の運営を考えた取り組みも並行して進められた。

世話人会は村づくりのコンセプトを生かすために各々のプロジェクトの要となったが、はじめにニコニコ診療所の設立準備にとりかかった。地元の農家には用地買収の協力、役場には医療・福祉施設の設置の許可申請などを働きかけた。

杉谷さんはこの頃から世話人会の事務局に携わることになるが、当初、単身で三重町に住み込んで、診療所の設立準備に参加していた。

図表3  
構想段階のパンフレット  
①、②、④、⑤、⑪などが実現



「何もない状態からのスタートだったから、2~3年間は本当に無給だった。とにかくメシだけは食わせてくれ、と世話人会のメンバーに頼んで、地権者との交渉などに走り回った。あの当時、みんながワーッとした熱い思いだけで・・・、行き当たりばったりでもとにかく始めようという雰囲気だった。私が後先を計算できる人間だったらやらなかったかも知れません。」と杉谷さんは笑いながら語った。

〈開発手法が決まり、村づくりがスタートした〉

村全体のエリア面積は約10haである。ここは都市計画上の白地であり、開発にあたっては「ニコニコパーク」として医療・福祉施設と住宅施設を整備するという目的で、地場の建設業者（世話人会にも入っていた）が開発許可で整備したものである。

世話人会の中で、コンセプトや個々の施設運営などソフト面と、開発や施設建設などハード面の役割分担がなされた。

医療法人ニコニコ診療所は平成3年12月に起工、平成4年8月にオープンしたが「とにかく我々にはお金がなかった」と杉谷さんは語る。建設会社に土地・建物を用意してもらい賃借契約で活動をはじめた（のち収益が増え今から3年前に買い取った）。

ちなみに今回、私が訪れたときに、診療所のウラに、

まだ資金に余裕がなかった頃、ニコニコ生活村が知的障害児の活動のために父母の会と一緒に建てたというプレハブづくりの作業所が残っていた。今は使われていないその施設は、診療所の設立準備と同時に知的障害者や高齢者の作業所も設置しようとしていたもので、狭かったが様々な活動ができたことで大変喜ばれたという。

〈最初は来る医者もなかった〉

名も知られていないニコニコ生活村では、出来たばかりの診療所にお医者さんを連れてくるのに最も苦労した。「今でこそ診療所も住宅も老健施設もできて、充実したような格好になったけど、当初は周りに農家が30軒ばかり建っているだけ・・・。野生の狸も出たりして・・・。呼びかけて来てくれるようなお医者さんはいなかった。しかし、熱意のある人に来て欲しいという条件は妥協しなかった」と杉谷さん。

結局、「半年でもいいから現地をみてください」と都会の病院と連携してリフレッシュ勤務で期限付きで呼んだことがきっかけで、定期的に医師が来るようになった。今では常駐で5名の医師が活躍するようになっている。

〈まず初めに地域にファンを沢山つくりたいと考えた、地域に出かける健康講話のスタート〉



生活村の中の風景（福祉住宅）

ニコニコ診療所では当初3年目の単年度黒字を目標に営業方針を決めた。大野郡内に大きな病院がなかったものの、小さなニコニコ診療所が注目されるには、時間がかかるものと思われた。

そこで、夕方、診療所の勤務が終わったのちに、医師やスタッフが数人ずつで地域に出向いて健康講話を開くなど、PR活動をはじめた。

地域のお年寄りや、若いお医者さんが無料で健康のアドバイスをしてくれるというのでうれしい。1回あたりどっと10~20人ほど集まるようになった。こうした活動は診療所の活動を外に広げて、地域により密着した医療を行いたいという熱意からきたものだったが、結局、これが診療所の経営を楽にした。

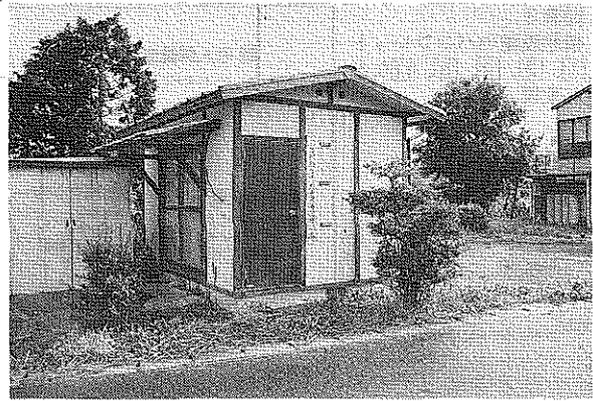
「講話を聞きに来る高齢者の20人に1人くらいの割合で、身体の調子が思わしくない人もいて、そうした人は診療所を使ってくれるようになった」と杉谷さん。「はじめの頃は、講話が終わった後にビールを頂いたりして土地の話の話を聞いたりした。講話というよりも選挙の個人演説会という感じだったなあ。結局、それがニコニコ村のファンとなり、いろんな形で支えてくれる人を得ることができた」。

やがて、朝・夕だけ知的障害者を駅から共同作業所まで車で送迎する役をかって出してくれる人や、農園を指導してくれる高齢者など、単に「医療行為を受ける」目的の人でなくても村づくりに参加するようになった。

この健康講話はいまも医師を中心に継続されて、これまで延べ約15,000人ものお年寄りに健康アドバイスをしている。

〈周囲の集落にとけ込んだ全く違和感がない開発〉

話を聞き終わったのち、杉谷さんに連れられてニコニコ生活村の中を歩いてみた。緑と農地に囲まれた既



生活村の中の風景（もとの知的障害者の作業所）

存の集落の中に、診療所、老人健康保健施設、食事センター、住宅などが点在している。戸建て住宅は小ぶりながらも庭が作られている。庭いじりをしたり犬の散歩をするお年寄りの姿がみられる。実はこの分譲地に杉谷さんの御自宅もある。奥さんを数年前に呼び寄せることができ、とりえず单身生活を終えることができた。

大規模な道路は作らず、建物はすべて2階建て以下で、周囲の民家に溶け込んでおり、一見するとどこからどこまでがニコニコ生活村なのか、農村集落との境い目がはっきりしない。

医療法人ニコニコ生活村は、始めは土地も建物も持っていない状態でスタートしたが、経営が上向く中で、少しずつ建設業者の方から土地を買い取って事業を広げていった（土地は開発許可の関係で建設会社が一括して持っていた）。

その「少しずつ型」の開発が無理なく進められているため、膨大に売れ残った造成地などもない。過大な投資ではなく、土地柄にも合っている。

一方、「どんなものになるかわからなかった」という不確実性が高い施設については、借地のままにしているところもいかにも無理がない。ニコニコ農園は借地（現況農地）で耕作したが、まともにやるとかなりの人手となったため、村としての利用だけでなく、他県の高齢者生協の菜種油の実験農場としての利用申し込みに応じるなど、今後の活用方策が考えられている。

また、ニコニコ動物園は、羊、鶏、猪の子供などを飼って、来村者へ開放して当初喜ばれていたが、動物同士の問題、カラスや猫の侵入などが相次いで、世話にかなりの人手を要するようになり、今のところやむを得ず取り止めにしている。



法律で定める「特別非営利活動」(法第二条別表)

- 保健、医療又は福祉の増進を図る活動
- 社会教育の推進を図る活動
- まちづくりの推進を図る活動
- 文化、芸術又はスポーツの振興を図る活動
- 環境の保全を図る活動
- 災害救援活動
- 地域安全活動
- 人権の擁護又は平和の推進を図る活動
- 国際協力の活動
- 男女共同参画社会の形成の促進を図る活動
- 子どもの健全育成を図る活動
- 前各号に掲げる活動を行う団体の運営又は活動に関する連絡、助言又は援助の活動

- ・ NPO法はめずらしく議員立法であり、阪神・淡路大震災のときのボランティア支援のために考案された。実際にNPO活動をしている人の意見も取り入れている。
- ・ NPOの願いは、法人格が欲しい、税制の優遇措置が欲しいの2点だったが、国会で法案が先送りされそうになったため、とりあえず法人格を与えるという部分だけでもということで法が成立された。税制については3年以内に検討することになっている。
- ・ なぜ法人格が欲しいかというと、個人では、契約や物品の購入などで個人に負担がかかる、相続税がかかる、社会的信用を得にくい等の問題があったから。
- ・ 課税は、営利活動については会社と同じ扱いを受ける。税制優遇ができた場合も、寄附については減免されるが、営利活動に対してはそのままだろう。
- ・ 法人になるには登記が必要なので、必ず事務所がいる。それは個人の家でも良い。

● 県に意見を言うなら今のうち

- ・ 法の施行は12月ではないかといわれているが、それまでに県では認定の条例を作らないといけない。活動している人たちが今のうちに県に意見を言っておくと反映されるかも知れない。また、そうしないと実際に使えるものにならない。
- ・ 県内でNPOに認定されようとするのは、まず介護保険に関連する団体だろう。事業としても成立する可能性がある。NPO法と介護保険法は抱き合わせで出来たともいわれている。
- ・ 法人格が無いことで困っている団体は認定を目指し

た方がいいが、特に困ってなければ急ぐ必要はないのではないか。手続き、会計等の煩雑さが増えるだけかも知れない。

● 儲かってない会社をNPOにできるか。

- ・ このような団体はNPOになれるか。
  - 同窓会は……会員が特定されてしまうので難しい。同窓会の中の有志が開かれた会を作って、12項目の中の活動をするならいいかも。
  - 学会などは……不特定多数の利益になるかどうか。活動内容も研究だけではだめなのでは。手足を動かす活動が重要になる。
  - 北九州ファンクラブなどは……活動はまちづくりに関するのでもいいと思う。特定の地域での活動になる部分がどう解釈されるかによる。
  - 儲かってない株式会社がNPOになるのは……そのまま申請するのはだめだと思うが、同じメンバーで別組織としてNPOをやるというのはできるだろう。
- ・ NPOの認可は、社団法人の認可をゆるめたようなものではないか。
- ・ NPOは営利活動でないので、銀行は基本的に融資はしない。今後フィランソピーとして融資の対象に認められるかどうか。
- ・ 資本金が準備できるなら、会社を作った方が早い。
- ・ 事業として成り立ってない会社は、NPOになっても成り立たないだろう。

なお、後日聞いた話によると、認定された団体の名称は「特定非営利活動法人○○○」といった形になるようだ。(株)や(財)のように(特)(これは意味不明)や(非営)と付くのだろうか。認定されていない団体はこれに類するものを名称に付けられないので、外見的にはそこで区別できる。また、通称の「NPO」については使用に制限はなく、未認定で実質的にNPO活動をしている団体が「NPOです」というのは問題ないようである。

NPOに関しては、今後もセミナー等を開催していきたいと考えていますので、よろしくお願ひします。

(伊藤 聡)

天神にて人もうけの会

— 第6回よかネットパーティー —

5月23日、天神のオアシス「警固神社」にて第6回よかネットパーティーを開催いたしました。

参加者は約70名と、にぎやかなパーティーになりました。

今年パーティーを開催するにあたって、所員で話し合い次のようなことを決めました。「人もうけを中心とするパーティーにする」、よって、「食べ物、飲物は、事前に用意せず、参加者の持ち寄りにする」、「ゴミ対策を考えて、有田焼のお皿を用意する」以上の3つを決めたことで、考えていた以上に楽しいパーティーになりました。

●人とともに料理が増えていくパーティー

今年参加型に力をいれるために、当所ではおにぎり、ビール、恒例のどぶろく、手作り薫製、その他2、3種類の料理しか用意しませんでした。そのためパーティー前のテーブルはひっそりとし、参加者持ち寄りパーティーが成功するの不安でした。しかし、人とともに料理も増え、最後にはテーブルから溢れんばかりのお皿が並びました。また、手作り料理、果実酒が目立ち、「これは家内がつくった黒豚の煮込みです。材料にとて

もこだわってるんですよ。薩摩の黒豚に、和歌山の醤油、奄美の黒砂糖を使っています。」などと楽しい食べ物自慢もたくさん聞くことができました。また、手作りのびわ酒が美味しかったのでそれを伝えると、親切に作り方を教えて下さいました。さっそくびわ酒をつけ込みましたので、来年のよかネットパーティーでその出来を見ていただこうと思っています。

その他料理にまつわる楽しい話がたくさんあったようです。下の表を見て頂ければどれだけテーブルの上がにぎやかだったか想像していただけるでしょう。

●天神にて人もうけをする

よかネットパーティーが人もうけの場になったと実感したできごとがあったので紹介します。

立花町から松尾農園の松尾さんが参加して下さいました。以前私の友人達と松尾農園に遊びに行き、荀狩りをさせていただきましたが、今回は松尾さんがパーティーに来て下さいました。松尾さんが帰る際、あいさつをしていると、少し離れたところから嘉穂町の福田さんの「今度伺います」という声が聞こえました。

また所員も松尾さんと農園の話をし、今度遊びに行くこと約束していました。農村で「都市と農村の交流会」が開催されているのを聞きますが、今回は天神にて「都市と農村の交流」が行われたのでした。

パーティー食べものリスト

【料理】	【産地】	【料理】	【産地】	【料理】	【産地】
ミミガー	沖縄	けつとばし	福岡	百年の孤独	宮崎
のり	韓国	うなぎの蒲焼	福岡・柳川	鶏脂出	宮崎
めんたい	韓国	かまぼこ	福岡	綾町ワイン	福岡・綾
柿の葉寿司	京都	黒糖ドーナツ	熊本	白岳しろ	熊本
豆腐の味噌付け	熊本・泉村	チョコレート	北海道	美少年	熊本
佐賀のり	佐賀	ゴーヤチャンプルー	手作り	球磨焼酎	熊本・球磨
唐津ざる豆腐	佐賀・唐津	岩岡流ししゃもの薫製	手作り	房の露	熊本・球磨
馴れ寿司	滋賀・大津	焼き餃子	手作り	しょう	熊本・球磨
ぼやの塩辛	青森	薩摩の黒豚煮込み	手作り	ボンカンワイン	熊本・天草
かすまき	長崎・対馬	高野豆腐とふきの煮物	手作り	菱娘	佐賀
やきとり	長崎・対馬	小田風スベアリブ	手作り	能古見	佐賀・鹿島
からすみ	台湾	たこの薫製	手作り	村尾	鹿児島・川内
水なす	大阪	空豆の煮つけ	手作り	白嶽	長崎・対馬
さいぼし	大阪・羽曳野	かくや姫パン	手作り	寒北斗	福岡・嘉穂
鯖寿司	大分・大山	焼き豚	手作り	黒田武士	福岡・嘉穂
きすの開き	大分	ボンデケージョ	手作り	しげます	福岡・八女
あゆ	大分・日田	手づくり薫製	手作り	近つ飛鳥	大阪・羽曳野
うるか	大分・日田	ピロシキ	手作り	会津の銘酒	福島・会津
鉄砲づけ	大分・別府	するめ		どぶろく	手作り
あごの干物	長崎	水羊羹		山桃酒	手作り
生うに	長崎・壱岐	薫製		ブルーベリー酒	手作り
大名のまんじゅう	福岡	瓶覗	新潟	びわ酒	手作り
珍品かまぼこ	福岡	ワイン	アフリカ	コーヒー酒	手作り
点心	福岡	ワイングラス	ドイツ	梅酒	手作り
中華点心	福岡	ワイン	フランス	花梨酒	手作り



有田焼きのお皿とワイングラス

### ●有田焼で贅沢な気分ができたパーティ

有田で観光の仕事をしていただいたこともあり、その際委員の一人だった篠原溪山窯の篠原さんをお願いし、人の輪を表す「円」を描いたお皿を安価にて提供していただきました。予め参加者の名字の一字を皿に印し、パーティの最初から最後まで使って、家に持ちかえていただきました。少し贅沢な気分も味わえ、お皿は好評でした。また、有田のしん窯の梶原さんにワイングラスを提供していただき、一段と豊かな気分になることができました。

さて来年のよかネットパーティ、企画から参加したいという方いらっしゃいませんか？また、今年よかネットパーティに参加してご意見、感想等ございましたら当所までご連絡下さい。（七搦 かおり）

## 白砂の自然環境と生活防災施設

熊本県天草町は、天草諸島の下島の西側にある町である。熊本市からの距離は116km、福岡からだ熊本市まで100km、合わせて約220km、車で約4時間ぐらゐのところにある。

この天草町高浜で、なぎさ五十五選に選ばれたことのある白鶴浜の護岸改修をめぐって町が揺れている。

### ●天草陶石

ここで少しこの地域のことを紹介したい。司馬遼太郎の「街道をゆく17 島原・天草の諸道」によると、天草諸島下島の西端には、磁器の原料である陶石「天草陶石」が無尽蔵にあると言われている。江戸時代に大坂夏の陣で敗れた落武者が一家でこの高浜に移り住んだ後、庄屋となり、砥石として利用されていたこの石

を使って、やきもの産業を興そうとした。その理由は、地形的な条件もあり、この地域の石高も限られていたため、生活は皆苦しく、外貨を稼ぐための産業づくりをしたかったということのようである。苦勞して磁器は生産できるようになったものの、商品として積み出し販売するためには、船運賃が相当にかかるため、結局は原料の陶石を売り出すことになった。当時の磁器製造技術は現在も高浜窯としていくつかの窯元に受け継がれている。また、ご存じの佐賀県有田町の磁器製造に、この天草陶石は欠かせないものになっている。

### ●海岸の利用と整備

昔は、この陶石は高浜から船で運ばれていたようだが、現在は陸送となり、海運業としての港利用はほとんど無く、漁港としての利用のみとなっている。

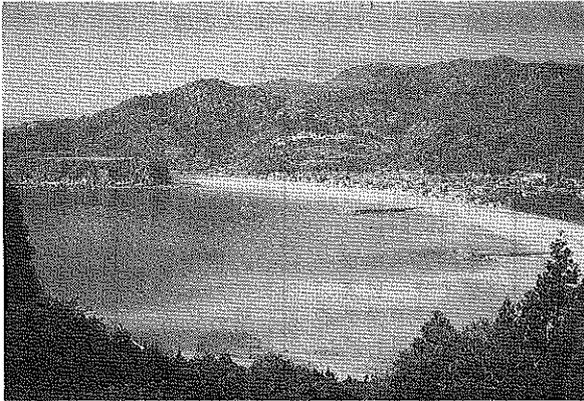
こういう歴史のある高浜の白鶴浜は、延長が1kmを超える白砂浜で、海水浴客も毎夏多数やってくる地であり、地元の人々も自慢する砂浜でもあり、稼ぎ頭の地域資源でもある。

しかし、浜は外海に面しているため、高波と砂浜の浸食防止、さらに漁港の防災対策としての工事が昭和49年に行われた。それは、階段式護岸を設置し、砂の移動を防ぐために浜を3地区に区分する100メートルの突堤が2基設置された。その後、昭和54年には、漁港を護るために高浜港沖合500メートルに400メートルの防波堤が建設された。

これらの整備の結果、浜の砂はどうなったか。浜の北側部分は細くなった。そして、南側部分は堆積し、濼みも見られるようになり、これを解決するために、2つの突堤を壊して新たに中央部により大きな突堤を設置し、さらに現在の階段式護岸を海側へ拡張、陸との間に道路と植栽を新たに設置し、民家と砂浜の間を広げようという新たな護岸整備の計画が、町を揺らしているのである。

この問題を知ったのは、よかネットの読者である熊本のKさんが、天草町高浜の地元の人と知り合いで、いまの計画ではまた同じことを繰り返してしまうという不安から、何か良い方法がないだろうかという相談を受けたことによる。

昭和50年前後に行われた工事の時も、そして今回も工事を行う県・町側は、もっとも優れたプランと言っている。しかし地元の人たちが思っているのは、以前の工事の時も同じことを言って実施したけれども、問



南側から望む白鶴浜

題は解決されず、ここで同じことを繰り返せばもはや残っている自然も無くなってしまふということであり、こういうやり方そのものに不信感を露にしている。

●何のため、誰のための事業か

この問題に限らず、いま全国の公共事業の見直しの流れと同じように、無駄な投資になるのではないかという疑問と、これまで各地で行なわれてきた行政主体による計画立案、事業実施という事業プロセスのあり方が問われていると思う。また、事業の目的とするところが、地元の人たちとどういう接点で進められたか、あるいは生活する人たちのニーズと合致しているかどうかという点が重要である。

計画策定から事業のプロセスに関しては、住民参加のまちづくりというのが今盛んになっており、住民の意思を反映する一つの方法として用いられている。いずれは、策定だけでなく、事業主体づくり、あるいは住民、自治体、企業など地域の関係者が共同（パートナーシップ）で行う環境創造活動のような非営利の組織づくりによって地域づくりを推進するシステムが求められるであろう。

しかし、今回のような自然資源と防災のような問題の場合、地元のニーズには、防災施設と景観、あるいは自然環境との共存のあり方を解決する方策が必要であり、現在の住民のニーズと同時に将来のニーズも含めたプランニング、そしてプロセス段階での住民意思の尊重が必要ではないだろうか。

そういう意味では、今住んでいる住民だけの意志による計画づくりと、行政の役割として地域づくりをリードする役目をきちんとした上で事業を進めるという姿勢が大切ではないだろうか。

話しが横道に逸れたが、天草町の高浜地区では、こ



昭和50年前後に整備された階段式護岸

の計画をめぐって今後も論議が続くようであるが、いずれはなんらかの方法で問題を解決することが必要であろうが、皆が納得できるまちづくりをすすめてほしいと願っている。（山辺 真一）

山村集落にも遊廓があり、多くの文化が息づいていた。 — 大分県宇目町木浦鉦山 —

この冊子の初めの方で紹介している「ニコニコ生活村」取材が夕方であったこともあり、ニコニコ村の専務に「今日どこか泊まれるところがないですか。」と聞くと「原物しか出ないところがある。そこが良かるう。」ということになり、土地感のない我々は言われるままに、隣の宇目町にある民宿「梅路」へ向かった。

今、宇目町で最も有名な「トトロ」や「トトロバス」のあるトトロ集落を通り、宿に着いたときには出発から1時間が経過していた。

この民宿のあるところは、江戸時代初期から金や錫などの鉦山採掘で栄えた「木浦鉦山」という集落であった。夕食には大将のおもてなしで「囲炉裏」を囲んで、原物なる“鹿刺し”や“鶏の炭火焼き”などに舌打ちながら、この集落の話を聞くことができた。翌朝に1階の座敷で食事していると、鴨居に鉦山の歴史などと交じって花魁道中の写真がいくつも掛けてあったので、その理由を聞くと、女将さんは現在編集中の木浦集落の歴史や文化などをまとめている原稿を持ってきて、丁寧に説明して下さいました。このお話の中で宮崎県と大分県との県境近くにある木浦鉦山という山村集落での歴史と豊かな文化に触れることができたので、いくつかを紹介する。

・現在、50世帯で小学生は2~3人ぐらいであるが、昭

和初期頃の全盛期には500世帯程あった。

- ・この集落には昭和初期まで遊廓があったそうで、集落のはずれには遊女の墓がある。また、明治29年当時の遊女の手紙も残っている。
- ・集落内には今でも3件程、旅館の看板を掲げている家屋がみられた。これは、鉾山関係の人が一度この地に来ると日帰りできないため「旅館業」が発達したとのこと。また「運び人」や「役所の人」などの人によって旅館が分かれていた。
- ・この地で生まれた民謡も残っており、女将さんは唄が生まれたという文化の高さに感激し、集落の歴史・文化をまとめる作業を思い立った。

民宿の女将さんは、この地で亡くなっていった遊女の弔いと集落の歴史・文化を閉ざしたくないという思いにかられ、10年前から「花魁道中」という祭りを始められ、今年も11月の第4日曜日にあるそうだ。編集中のゲラの中には、女将さんを筆頭に親子3代が扮した花魁の写真が収められていた。女将さんのこのような活動は徐々に木浦ファンを創っているように感じられた。私も11月には「花魁道中」見学と「猪鍋」を食べに再度訪れようかと思っている。(山田 龍雄)

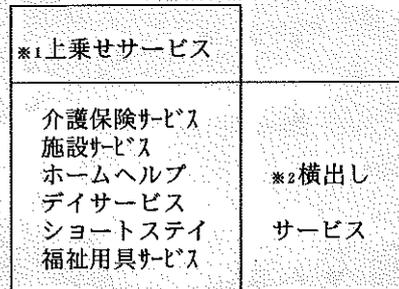
### 介護保険とは何か

去年12月に介護保険法が成立した。介護保険法という名前はよく耳にするがどんな法律なのか、実際に福祉関係の仕事に携わっている方を含め、勉強会をしようということになった。そこで5月27日に九州大学附属病院医療情報部の大河内二郎さんに介護保険への取り組みについてお話いただいた。お話の概要は以下の通りである。

- どれだけの高齢者が保険の対象になるのか
  - ・ 65歳以上の健康に対する意識では「よい」若しくは「ふつう」と答えた人が約8割で、介護保険が適用される可能性のある老人はわずか2割にすぎない。したがって、元気な高齢者に対する事業も、重要になってくる。例としては高齢者向け住宅、介助付き旅行・理容、保険、金融、資金運用等が挙げられる。

### ● 介護保険で受けられるサービスとは

選択の幅が広がった在宅介護サービス

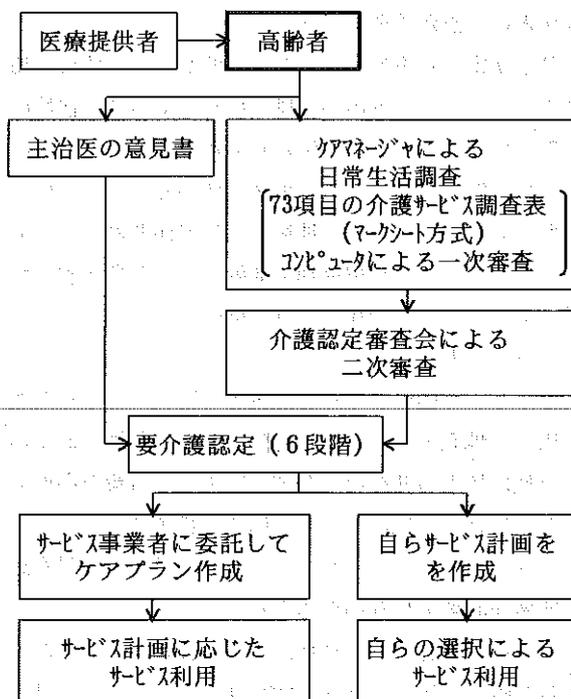


(※1 上乘せサービス：費用を追加して(自費)より良いサービスを受けることができる。※2 横出しサービス：介護保険法以外のサービス(例えば給食サービス)を受けることができる。)

- ・ 規制緩和により在宅介護サービスに民間、個人、ボランティアが参入し、競争が促進される。それによってサービスの質の向上につながるだろう。良いサービスを提供する事業者には多くの高齢者が集まるだろう。
- ・ 小さな村等では在宅介護サービスを行う企業やボランティアが全くないところもでてくるだろう。そういった場所では在宅介護事業者の誘致も考えられる。

### ● ケアプランについて

介護保険法の流れ



### ● ケアマネージャーは地域づくりの核となりうるか

・ ケアマネージャー(介護支援専門員)の業務は主に

- ① 保険給付申請のあった高齢者の日常生活動作の調

査、②高齢者のアセスメント、③サービス計画の作成、④サービス提供機関の調整である。さらに地域ネットワークの核になるために①地域の医療、福祉の窓口となる。②多様なサービスの紹介、斡旋を行う。③地域にどんなサービスが足りていて、何が足りていないのかというサービスの評価を行う。④データ蓄積（高齢者のニーズなど）によって新しいサービスの創造を図る。などの業務を行っていく必要があるだろうということだった。

#### ●ケアマネジャーになるには

- ・ケアマネジャーは医療・福祉関係の業務（実務経験3年以上）についていけば、試験を受けることができる。
- ・今秋に第1回ケアマネージャの試験があり、現場で働いている人がかなり多く受かるだろうと見込まれている。しかし、ケアマネジャーの数が確保できても、実際に対応できる人がどのくらいいるか疑問が残るところである。

#### ●介護保険の問題点

- ・介護保険の問題点は、①地域のどこにどのサービスがあるかというデータベースが整備されていない、②医療と介護の区分が不明瞭である、③給付額が不十分である、④サービスの市町村格差が大きい、等が挙げられる。

#### ●在宅介護システムの開発

最後に、大河内さんからご自身が現在取り組んでいる研究についての説明があった。現在、大河内さんは福岡県のヤングベンチャー育成支援事業の助成金を受けて、高齢者が地域で安心して暮らすための研究をされている。この中で現在、把握することが難しい、ボランティア団体や福祉医療施設、サービスなどの情報をデータベース化し、高齢者に適したサービスを自分自身で選べるようにできるシステムを考えられているそうだ。

まだまだ問題を抱えている介護保険ではあるが、これをきっかけに、高齢者に対するサービスのネットワークが広がり、高齢者向けサービスのベンチャー企業も生まれるのではないかと感じた。

今後さらに増加する高齢者のためのビジネスはこれから目が離せないのではないか。（小田 好一）

### 市内一のノッポビルはホテルのような高齢者施設

～福岡県中間市の高齢者福祉施設～

炭坑のまちとして栄え、現在は北九州市のベッタウンとなっている中間市にある高齢者福祉のまち、「ウェルパークヒルズ（WELLPARKHILLS）」を見学させていただいたので紹介する。

#### ●ウェルパークヒルズの概要

昭和59年の基本構想、昭和63年の特別養護老人ホームの開設に始まり、現在は7割程度の建設が終わっている。今のところ、70,000㎡の敷地内には（有料老人ホーム・ケアハウスを有する）21階建ての中間市一のノッポビルを中心に、病院、老人保健施設、特別養護老人ホーム、勤労者総合福祉センター、高齢者総合福祉センターがあり、営業を開始している。さらに、将来的には疾病予防運動センター、在宅介護サービスセンター、高齢者ケア付住宅、療養型病院、福祉総合会館、保育園、温室ハーブ園など、とにかく沢山の福祉施設が集まる予定である。

基幹となる施設は、「民間事業者による老後の保健及び福祉のための総合的施設の整備に関する法律（いわゆるWAC法）」の適用を受けているため、第3セクターの民間事業者（關西日本医療福祉総合センター）が事業主体となり、その後の管理運営を行っている（但し、有料老人ホームの運営は第3セクター、ケアハウス

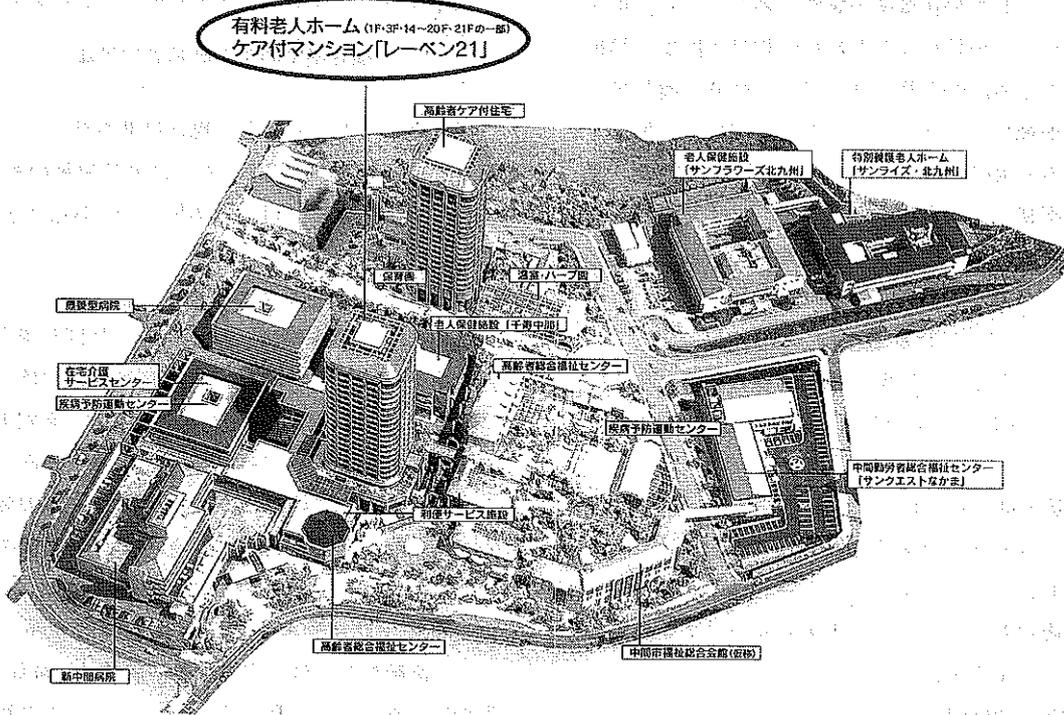
#### WAC法の基本的な機能構成

WAC法に基づく基本機能構成として（（）内はウェルパークヒルズの機能）、

- ①終身介護型有料老人ホーム（有料老人ホーム、ケアハウス）
- ②疾病予防運動センター（未）
- ③高齢者総合センター（一般市民参加の生涯学習、カルチャーセンター、コンサートホール等）
- ④在宅介護サービスセンター（地域介護実習・普及センター（県）、市の高齢者相談窓口、介護相談窓口、介護機器の展示・販売等）

の4つがあげられ、高齢者だけではなく、地域に開かれた施設として特に「中間WAC」などと呼ばれている。また、それぞれの施設に設置基準面積等が設けられ、中間市の場合は開発銀行の無利子融資を受けているが、各基準をオーバーしている部分が多い（第三セクターの手出しとなる）。これは、「福祉の為に高齢者が暮らしやすいために」という、事業主体の福祉に対する情熱があったからこそである。

現在はこれらのうちの約7割が完成している



の運営は福祉法人、建物、土地については区分所有)。この第3セクター「(株)西日本医療福祉総合センター」は、地元の建設業者が資本金の約8割を現物出資(土地)し、残りの2割については、地元企業、市(約3%)の出資で平成元年に設立されたものである。

●高齢者福祉の先進地中間市

炭坑のまちとして栄えた中間市の人口は、昭和35年の人口4万2千人から、5年後の昭和40年には3万3千人と炭坑の衰退とともに減少していた。しかし、北九州市小倉より車で30分という地の利があったため、高度成長期より北九州市のベットタウンとして人口も増加し、昭和55年より約5万人前後で横這いとなっている。

北九州市のベットタウンとして、若い世帯の流入はあるが、炭坑全盛期に市に移り住んだ世帯が高齢化しつつある(現在の高齢化率は平成7年度国勢調査では17%と特別高いというわけではない)という問題もある。

昭和59年、社会福祉法人より提唱された基本構想や、翌年の市の基本構想、平成元年、市が厚生省の「ふるさと21健康長寿のまちづくり事業」の計画策定市に指定されたことなどから、この新しい福祉のまちウェルパークヒルズや、炭坑住宅の建替に伴う高齢者向け住宅(現在のシルバーハウジングの原型)などが事業化されてきた。

ウェルパークヒルズには、市の在宅介護の相談窓口や県の介護普及センター、介護用品のショップなど在宅で介護される方のための受け皿や、介護が必要な方、医療が必要な方の施設、地域の方が利用できるホールや、生涯学習の場、コンビニエンスストアなどが整っている(スーパー、ホテルも整備予定)。また、このような施設を利用しながら、有料老人ホーム、ケアハウスで高齢者が安心して、便利に暮らせるような施設が整備されつつある。また、ここから離れた市内の道路沿いには、医療法人や福祉法人の施設の看板が目立ち、中間市は福祉サービスの充実したまちとして、人を呼び込む魅力(ハード面で)を整えつつあると感じた。

●将来は700人雇用、保育所などのサービス施設も検討

現在、この中で働く人は約300人で中間市のサービス業従事者の約5%であるが、完成すると従業員約750人の大きな福祉団地となる。そうになると、働く人の為の施設、例えば保育所、スーパー、飲食店などが必要となってくる(保育所の計画はある)であろう。高齢者の需要を予測しハードを整える。雇用者が増えると雇用者の需要に応えるために周辺の整備を行う。その整備されたサービスに集まる人々が増えると、その人達の需要に応えるために整備し…と、「福祉でまちが大

大きく、豊かになるといいなあ」と思いながら、21階建ての有料老人ホーム、ケアハウスの入った建物を見上げた。(澤谷真紀子)

### ひまわりフェスタ in 海の中道

今年の7月にアジア太平洋子ども会議が福岡で開催される。それに合わせ、飛行機でやってくる子どもたちを大きなひまわりの花壇で出迎えようという企画があり、福岡県建築士会の主催で実行委員会が結成され、私もそれに加わるようになった。

場所は福岡市の「海の中道海浜公園」の大芝生広場(の片隅)で、5月17日(日)、直径約70mのひまわりの花をかたどった花壇に、6万粒のひまわりの種を蒔こうというイベントである。参加は福岡市内を中心とする小学校の親子、花のボランティアグループなどで、見ただけでは300人くらい(次の日の新聞によると600人)集まり、地元ラジオ局の生放送も入ってにぎやかに行われた。しかし、種蒔きをするというのは、苗を植えるのと違ってその場で結果が見えない。種を蒔く前後も土の花壇があるだけで、ほとんど同じ状態という、ある意味で地味なイベントなのであった。

ところが、種蒔きよりも前日までの花壇づくりが大変だった。何もない芝生の上に直径70mの白線を引き、1,300個のブロックと3,000個のレンガで縁を取り、トラック数十台分という土で花壇を作るという作業で、イベント当日はすでに疲れ果てていたのだ。

ところで、ひまわりの花壇は地上からでは大きすぎて全体が薄っぺらにしか見えず、公園内の大観覧車からも結構遠く、どうやらヘリコプターにでも乗せてもらわなければ良く見えないようだ。肝心の飛行機だが、何便かは花壇の上空付近を飛んでいたが、大きな飛行機の大半はややコースが外れ、あまり見えないんじゃないかなあという感じ。風向きが違えば、着陸は海の中道とは反対側からの進入になるので、全く見られないことになる。アジアの子どもたちを出迎えられるかどうかは運に期待しよう。

海の中道海浜公園は建設省の工事事務所と(財)海の中道管理センターが管理して、はじめは大いに協力してもらえるということで、会場を海の中道に決めたのだが、どちらも担当者が途中で代わったこともあったか、協力内容が当初の話とは違ってダウンしていた。ブロックやレンガは自前で持ち込み、花の種も提供してもらえず、場所も人目に付きにくい。実行委員会は急遽寄付や協賛金を募ることになり、当社も種代を出すことにした。こういうイベントは宣伝効果もあり入場者増に貢献するはずなので、もう少し喜んでもらってよかったような気がする。とはいえ、最も費用のかかる土とその運搬については協力してもらっているし、管理センターには毎日花壇の水撒きをやってもらっているのだが。

とりあえず、夏にはたくさんのひまわりが咲くのを楽しみにしよう。ただし、その後には花壇の撤去作業が待っている。(伊藤 聡)



図5-10 花壇の準備中。真中にステージがあり、全体がひまわりの花の形になっているのだが……。

“まちづくりなしで再開発はあり得ない”

九Qの会今年度の活動について

●平成10年度九Qの会の活動

今年度より、(社)再開発コーディネーター協会の九州の会「九Qの会」の事務局を引き受けることとなりました。昨年度までは、協会の会員を対象に講演会や見学会などを行ってききましたが、今年度からはどうしようかと悩んだあげく、九Qの会の会員数名で議論を行うことにいたしました。以下はその内容の抜粋です。

- ・まちづくりの考えなしで再開発はあり得ないので、再開発の話だけではなく、まちづくりについて話をしてもらう
- ・高齢者福祉に関すること知っておきたいし、大切だから、それも行う
- ・市街地活性化についてよくわからない
- ・住都公団、金融公庫などのまちづくりに関する取り組みを聞きたい
- ・会員の中で、再開発事業について話ができるひとがいるのでタイミングを見計らって話してもらう

これらをふまえ、今後、見学会や福祉関連の話、まちづくりに関する話、再開発の話などの会を開催したいと思います。

●第1会例会として佐賀市の再開発ビルを見学

去る6月3日、4月末にオープンした佐賀市の再開発ビル「エスプラッツ白山」の視察会を行いました。当初の参加予定人数をはるかに上回る40人強のコーディネーター、行政関係者、事務組合員、ゼネコンの方々のご参加をいただきました。

佐賀市の川崎助役の中心市街地活性化に関するお話の後、4階以上は住都公団の分譲住宅、1～2階店舗、3階は展示場となっている「エスプラッツ白山」に場所を移し、14年間の事業の経緯などをうかがって、建物の中をみせていただきました。

●御関心のある方の参加をお待ちしています。

また、会員の方以外でも、会に参加してみたい方は当社までご連絡下さい。(澤谷 真紀子)

編集後記

■今月号は、いろいろとネタも多く、また、書き手の熱い思いもあって、最近では20頁と多い編集になりました。小生とO君とが本の紹介記事を用意しておりましたが、残念ながら次回号にまわされました。(次回に掲載されるかどうかは分かりません。もしお蔵入りとなれば、小生3回目になるかもしれないと思うが……)

■5月の連休以降、プライベートや仕事の関連で近場の大衆浴場のいくつかに行く機会がありました。少しのぞいて見たところ、どれも賑わっており、元気が良く、近場の大衆浴場なるものが安・近・短の代表格のひとつであることを再認識した次第です。例えば、脇田温泉地内で民間の旅館が経営している大衆浴場(入浴料大人800円、打たせ湯、サウナ、ジェット風呂など有)は、土曜・日曜日には約1,000人程来ており、風呂によっては入る隙間がないこともあるようです。最近できた八女の「べんがら村」(入浴料:大人500円、70歳以上300円、その他地ビールコーナー、農産物販売所など)では、平日の昼どきに浴場側のロビーが50歳以上の中高齢者で賑わっていました。また、久山レイクサイドホテル内の浴場は値段が高い(大人1,700円)割に、日祭日は盛況のようです。

■今年の「よかネットパーティ」は、①料理持寄りの参加型とする、②できるだけゴミを出さないように各自陶器のお皿を利用してもらうという初の試みは、おもわく以上の成果があったように思いました。もし、来年以降も開催要望が高いようであれば、興味のある方には準備段階から是非参加していただきたいと思います。

よかネット NO.34 1998. 7

(編集・発行)

㈱九州地域計画研究所

〒810 福岡市中央区天神1-15-35 ホンダハピエ5F  
TEL 092-731-7671 FAX 092-731-7673

(ネットワーク会社)

㈱地域計画建築研究所

本社 京都事務所	TEL 075-221-5132
大阪事務所	TEL 06-942-5732
名古屋事務所	TEL 052-265-2401
東京事務所	TEL 03-3226-9130